

## APHPE におけるメンタルヘルス領域の研究動向

近藤 卓<sup>\*1</sup>

キーワード：メンタルヘルス，ヘルスプロモーション，連携，継続

### I はじめに

本稿では、臨床心理士としてスクール・カウンセリングの臨床に携わるとともに、大学で心理学を講ずる者としての立場から、今回の台湾での第2回 APHPE での、メンタルヘルス領域の動向について報告する。もとより、数百の参会者があり、同時並行的に多数の発表が行われた国際学会ゆえ、その全容をくまなく網羅して報告することはできない。筆者の耳目に留まった話題や発表に限ることを、まず最初におことわりしておきたい。

### II 現地のフィールドワークから

今回の学会では、エクスカースョンとして2012年5月3日にヘルスプロモーションに積極的に取り組んで成功している学校、病院、地域を訪れた。筆者は、学会でのディスカッションとともに、この現地訪問を楽しみにしていた。一気に多くの情報を得たので、そのすべてを報告することはできないが、筆者なりの視点で印象に残ったものを一つ取り上げてみたい。

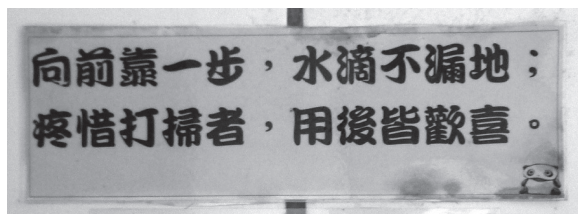


写真1 台湾・蓬萊小学校のトイレの張り紙

健康教育の目的の一つは、対象者が積極的な態度で健康習慣を身につけて実践するようになることである、と筆者は理解している。つまり、態度変容や行動変容がゴールになるのであって、単に知識を与えることではない。

今回の台湾訪問で、注目していたことのひとつがトイレの衛生管理である。普段日本国内で生活していても、各地のトイレでの張り紙が気になっていて、そのアプローチの仕方と効果に関心を持っている。実際に効果測定をした研究報告があるかどうか、未だ十分に調べてはいないが、少しずつ資料写真を集めているところである。

写真1は、今回のエクスカースョンで訪問した蓬萊小学校のトイレの張り紙である。日本の張り紙でも、もっとも多く見られる古典的なタイプで、「一步前進」を直接的に要請する「お願い・命令型」といってよいだろう。今回の訪台では、他にも病院や町の公衆トイレさらには故宫博物院などで、複数の写真を収集した。紙幅の関係でそれらの提示は割愛するが、筆者の見る限り一様にこの「お願い・命令型」であった。

さて、上記のタイプに次いで最近日本で比較的多く見られるものは、「いつもきれいに使って頂いてありがとう」という婉曲な言い方で「一步前進」を要請するもので、これを「慫慂無礼型」と筆者は命名している。また、少数ではあるが便器の中ほどに熱反応で色が変わるシールが貼ってあって、用を足す際に自然とそこへ尿を命中させなくなってしまう心理を利用したもの、「無意識前進型」がある。さらには、便器に向かって緩やかな

<sup>\*1</sup> 東海大学文学部

E-mail: ktaku@keyaki.cc.u-tokai.ac.jp

下り勾配が付いていて、自然に前に進まざるを得ないようになっていたり、便器の下部分を大きく突き出させた形にして、いやでも外には散らないようにしているもの、「物理的支配型」がある。

メンタルヘルスの言う、そのどれが好ましいのだろうか。また健康教育的と言う、どのアプローチが効果的なのだろうか。この点については、今後の研究の一つのテーマになりうると考えている。

今回、ヘルスプロモーションの成功例として学校、病院、地域を案内していただいたが、それらを見せていただいて私の脳裏に浮かび上がったのは、「連携」というキーワードであった。月並みなことになるが、やはり学校や病院が地域社会に溶け込み、地域の住民に受け入れられ互いに連携する中で、互いに輝きを増していくということなのではないだろうか。

### Ⅲ フォーラム、シンポジウム、研究発表から

今回は盛りだくさんの企画が揃っていて、6本の特別報告、3本の特別講演、6本の基調講演があり、フォーラムが5、ワークショップが3、シンポジウムが9という具合であった。筆者自身も、フォーラムとシンポジウムにそれぞれ一度ずつ登壇し、日本の子どもの問題と教師の問題を報告した。もちろん、その二つともメンタルヘルスの視点から、日本の学校における子どもと教師の置かれている状況を解説したものである。

シンポジウム1では、「台湾におけるがん患者の心理社会的健康の増進」という題で4名の発題があり、台湾における精神腫瘍学の現状やコミュニケーションスキルの訓練についての話題が取り上げられていた。シンポジウム6では、「インドにおける煙草コントロールのシステム・アプローチ」が取り上げられ、シンポジウム9では「日本と台湾の子どもの喫煙と受動喫煙の予防」について議論が戦わされた。煙草の問題、とりわけ子どもの喫煙行動には友人との関係性など、心理社会的な因子が深く絡んでいる、まさにメンタルヘルスの

な問題であると考えられる。

口頭発表では、「日本の子どもの死の認識の発達」に関する発表が複数見られ、さらには「デス・エデュケーション」や「ライフ・エデュケーション」に関する研究や実践報告が、日本や台湾の研究者と現場の教師からなされていた。台湾では、すでに中等教育のカリキュラムに生命教育が位置づけられており、今回の学会の会長の一人である Asia University の黄雅文教授ご自身、前任の台北教育大学の生命学研究所の所長であったこともあり、黄教授の教え子の小・中学校の先生方の実践報告も行われていた。筆者自身も、いのちの教育の理論化と実践の研究を通して黄教授とかねてより親交があり、互いに影響を与え合ってきた。一連の研究発表から、そうしたこれまでの交流の成果の一端がうかがえたのは嬉しいことであった。

他には、日本から「大学生の摂食障害とボディイメージ」、イランから「鼻を美容整形した者のパーソナリティ特性」という興味深い発表があった。

ポスター発表では、日本から「新人看護師が言語的・身体的な暴力を受けた際のトラウマ軽減における認知行動療法の効果」、台湾から「高血圧高齢者における自助グループの効果」「がん患者のうつ病スクリーニング」「がん患者の精神的柔軟性とレジリエンスの関係」など、医療領域に関連するメンタルヘルスの発表が多く見られた。

精神科医療に特化したところでは、台湾から「精神科患者と家族の関係からみた、患者の攻撃性と暴力の管理」「精神科患者の体重コントロールの介入プログラム」「精神科患者のストレス、不安、睡眠障害に対するリラクゼーションとバイオフィードバックの効果」、タイから「うつ病とそれに伴う事象と関連要因」、香港から「精神科看護師のストレス知覚のケア」など、意欲的な報告があった。

一方で、日本から「高校生の健康危険行動、自己管理スキル、社会的スキルと自尊感情」「定年退職者のメンタルヘルス」、香港から「家族内コミュニケーションの増進の意義」、韓国から「非行少年

と一般生徒のライフスタイルの比較」, 台湾から「農村地帯の高齢者におけるソーシャルサポートと識字能力の関係」「生理学・心理学・社会的学的視点から見た大学生のメンタルヘルス」などの, 身近な家庭, 学校, 地域社会での日常生活におけるメンタルヘルス関連の発表も少なくなかった。

#### IV おわりに

筆者は, 千葉での第1回大会に引き続き, 今回

もこの学会に参加し, 発表もおこなった。前回お会いした香港や台湾などの研究者との再会を喜んだり, 互いの研究の進み具合を確かめあったりして, 大きな励みと力を得たように感じている。

やはり, 何事においても継続は一つの力となるということを, 改めて実感した今回の APHPE であった。

(受付 2012.7.2. ; 受理 2012.7.13.)